
科学学園都市住民が魔法学園都市の祭りへ行く

杉田玄白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

科学学園都市住民が魔法学園都市の祭りへ行く

【Nコード】

N4366P

【作者名】

杉田玄白

【あらすじ】

6月18日急に「打ち止め」がいなくなった。東京にある科学学園都市内にはいる可能性が低い。新たにできた可能性として千葉にある麻帆良学園があげられる。一方上条家に父、刀夜から麻帆良学園で行われるまほら祭にこいという手紙が来る。「一方通行」や「幻想殺し」がいくのを知らない神楽坂明日菜や、ネギ・スプリングフィールドは、もくもくとまほら祭の準備を進めている。

「あゝ野郎、ドコ行きやがった」 by 一方通行（前書き）

「とある魔術の禁書目録」と「ネギま!」との、原作が漫画と小説のクロスだから少し無理があるかと思いましたが、できるだけ頑張っていきます。

「あン野郎、ドコ行きやがった」 by 一方通行

「あン野郎、ドコ行きやがった」

一方通行は、第一四学区にいた。

実は、打ち止めがいなくなつて二日目になっている。一日目はほつといたら帰つてくるだろうと思つてほつといていたわけだが、
「クソがあ」

全く帰つてこなくて、一方通行自身が探しに行つてゐるわけだ。

御坂妹達もいないことに気が付き搜索を行つてゐるのだが、

『こちら検体番号一八五三四号、現在第一学区から一二学区までを洗つたが打ち止め及び、二〇〇〇一号の居場所を特定できず。とミサカは息を切らしながら報告してみる』

『こちら検体番号一四三三二二号、現在第二一学区上空からヘリで搜索中。いまだ発見できず。とミサカは半ばあきれつつネットワーク上に情報を流す』

『こちら検体番号一九〇〇三号、色々な方法で二〇〇〇一号と連絡を取れないか試したが無理だった。とミサカは、あいつドコ行つたんだよ、という本心を隠しつつ他のミサカへ情報を送る』

という状態なのだ。

「チツ、一旦戻るか」

黄泉川のところへ戻つて情報を得たほうがいいと判断したのだから、
う。が、

「つつつてもアテになンねェんだろうけどな」

一方通行は横を通る車を軽くおいぬかしながら黄泉川のアパートへ向かう。

「学園外にいる可能性が高いとはどオいうことだ」

「そついうことじゃんよ」

横泉川は、淡々と告げる。

「まあ、ちよつと警備隊の方で各学区の施設のIDログを調べたんじゃないよ。するとどこにもその打ち止めのIDがなかったんじゃないよ」

この学園都市内の住民には全員ナノデバイスを打ち込まれている。なかにはカードとして持ち歩いている人もいるが。各施設を使う際にはその人の履歴が残る、それがIDログだ。

「この二日間レストランはおろか駅やバスも使っていない、ていうことかア」

「そういうこよじゃん」

一方通行は一つ舌打ちをした。

「なんだこれ」

上条家に一通の手紙が来た。

「上条刀夜？」

「とうまとつま、とれなに？」

中身はどうも上条刀夜もとい当麻の父からの手紙だった。

「父さんからの手紙」

「なんてかいてあるの？」

「まてまて、いま読むから」

適当にインデックスをあしらいながら当麻は手紙を読み始める。

「『やつぽー、当麻はげんきかー？、こつちは毎日風邪ひきそうおなこことやってるぞー。実はな、明日からまほら祭って言つのをやるらしいんだよ。よかつたら行って来い。チケットとかいろいろ入れであるから。おれたちもいくぞー。じゃなー from 上条刀夜』」

当麻とインデックスが二人揃って黙り込む。さきに、口を動かしたのはインデックスだった。

「風邪ひきそうなことってどんなこと・・・？」

「・・・海でも泳いでんのか、でもいま十月だし」

「・・・・・・・・行ってみようかなあ」by上条当麻（前書き）

そういえば、この題名と全く同じ題名の小説が存在しますが、あれは私がミスで投稿してしまったものです。気にしないでください。というより誰か消し方を教えてください。

「……………行ってみようかなあ」by上条当麻

「……………うん」

現在当麻は、ライトが付き始めた車の横を歩いていた。あの刀夜からの手紙を見て行ってみようかなと思っていたのだ。もともと外の祭りは全然見たことがなかったし、たとえ規模はしょぼくても、おみこしさえ見たことのない当麻だったからそれを見れるだけで結構興奮しそうだった。

「……………どうしよつかなあ」

当麻も「まほら祭」についていろいろ調べてみた。分かったこととしては、この学園都市内で行われる祭りではないということ、期間は6月20日から22日までということ、祭りの内容はおおざっぱに言うとか文化祭に近いものということ、その割には規模が半端なく大きくて全国から人が集まってくるといったことだった。

「……………行ってみようかなあ」

当麻はオレンジ色に染まった空を見上げながらつぶやいた。

（行くとしたら、誰を誘うかな。土御門？ 美琴？ インデックスはもちろんだな）

「あんた、何さっきからぶつぶつ言ってるのよ」

「おわあ」

いつの間にか当麻のうしろには美琴が歩いていた。

「びつくりしたああ」

「ちよつと何勝手にびつくりしてるのよ！」

バチバチと美琴は髪の毛を鳴らしながら言った。

「うん、なあ美琴」

「なによっ」

「い、いやさ、次の20日空いてないか？」

「へ？」

「次の20日から22日までさちよつと外の祭りに行きたいんだけどさ、どうせなら美琴も一緒にどうかな、っと思って」

「え、え、私でいいの？私のお母さんの方がいいとかじゃなくて？」

「ん？そうだな、美琴がむりつつうんならそっちに」

「いやいやいや行く行く行く行く行く行く」

「分かった分かった分かったから、首つかんで揺さぶるのやめてくれえ」

「え、うん」

当麻はげほげほ言いながら美琴の顔を見た。

「つて言うかいいのか？そんなに簡単に決めても。外に行くんだぞ」

「いいのいいの。何としてもその日だけは開けてくるから」

「???」

「んで、外ってどういうこと？」

「だからな、その祭りはこの学園都市内でするんじゃないんだよ」

「？、というと？」

「千葉で行われるんだよ、その祭りは」

「ちばあ!？」

「無理だつたら無理しなくてもいいけど」

「行く行く行くいくー」

「分かった、分かったから首を絞めるなああああああ」

「アクセラレーター」

「一方通行！」

「なんだよ」

黄泉川が大声で叫ぶのがうつつとしそくに一方通行がそちらを見る。

「おおまかな打ち止め（ラストオーダー）の居場所をつかんだんじやんよ」

「ンで、ドコなんだあ」

「どうも、あいつは千葉に行った可能性が高いじゃんよ」

「何でなんだよ」

「あそこには、ここと同じような学園都市があるじゃんよ。そこはここほどでもないが科学力が半端ないんじゃないか」

「ハッ、言ってくれるねエ」

「というわけで行って来いじゃんよ」

「ハア？」

「^{アンチスキル}うちは警備隊の仕事で忙しいんじゃない。だから代わりに行って来い」

「なんでおれがア、いなくちゃなンネエんだよオ」

「まあまあ、そこではちょうど祭りもあるみたいなんじゃんよ。ついでだから遊んで来い」

「チッ、めんどくせエ」

黄泉川がため息交じりで続ける。

「まあ、敵と対峙する可能性もあるけど……まあ問題ないじゃん」

「それより、チョーカーはどオすんだ？」

「それなら特別にあのカエルから予備バッテリーを貰ってきたんじゃない」

黄泉川がつきだしたバッテリーをみて、一方通行は少し驚く。

「あれ作るの、そうとうめんどーなんじゃなかったかア」

「それは使い捨てなんじゃんよ、お前が今つけている充電可能なチョーカーよりずっと仕組みが簡単じゃん。まあ、よほどの長期戦がない限りはつかうこともないじゃんが」

「おいしく、ってミサカはミサカは喜んでみる」byミサカ

「ほれ、これ食べてみい」

「わーい、いっただつきまーす、ってミサカは手を合わせながらいつてみる」

打ち止め（ラストオーダー）は髭の長いこれまたデカイヤリングのした年取ったジイさんからもらったりんご飴にガジリ付く。

「おいしく、ってミサカはミサカは喜んでみる」

「ふおおおお、じゃあこれも食べなさい」

「わーいわーい、ってミサカはミサカは喜びのあまりはしゃぎまくる！」

「いいのお、子供は元気で可愛くて」

「もつとちょうだい、ってミサカはミサカは上目遣いで頼んでみる」

「じゃあ、これも食べなさい。大丈夫、たくさんあるから」

カン、カン、コン、カン。

夜、暗い教室の中で釘を打つ音が響く。

「（ちよつとまき絵さん、金槌の音が大きいですわよ！）」

「（わかってるよいいんちよ。けどこれ以上小さくするの無理！）」

「（このかー、ちよつとそこのぺんきとってー）」

「（はいなー）」

暗い教室の中、30人ほどの生徒が全員金づちやのこぎりといった工具を持っていた。みんな、もうすぐ始まるまほら祭への準備をしているのだった。

「（くつ、まほら祭の準備での居残りは前日だけだって言うのに）」

「（いいじゃんいいじゃんそんなこと）」

「（ううゝ、ぼく先生なんですけどゝ）」

「（ほんとに申し訳ありません、ネギ先生）」

「（ありがとねー、ネギ君）」

ネギ君、ネギ先生と呼ばれているのは3 - Aの担任である10歳の、いわゆる子供先生なのだ。みんなの手伝いに駆り出されたのだが、まだ子供のせいなのか、禁止行為にもかかわらず生徒を止めるどころか一緒になってやっているのである。

「（やばい、鬼の新田が来たよっ）」

隣の組の3 - Bの生徒が伝えに来る。

「（オーケ、みんな隠れて）」

カン、カン、カン、と二つの足音が近ずいてくる。
ん？新田じゃない？と、クラス全員が思う。

「（ん？だれなんだろ）」

「（つちよつとゆーな、見つかるで）」

物陰に隠れているゆーなをアスナが止めにかかる。

「（わかってる、だいじょーぶだよ）」

ゆーなは、物陰からチョコつと頭を出して教室の扉の方を見る。
が、

だれもいない？

そこでアスナに背中側の襟をつかまれて引つ張られる。その瞬間、
なにか静電気のようなものを扉の方から見えた。

そして、

「やつぱり、よるの学校ってこわいかも、ってミサカはミサカはぶるぶる震えてみる」

「わざわざ強がって夜に来ることもないんじゃないのかのお」
・・・だれ？

「（チョット頭出し過ぎ）」

「（いや、ちよつと）」

カン、カン、カン、という二つの足音が遠ざかっていく。
みんな、ばれなくてよかった、と安どのため息を漏らす。

「（ねえ、このか。今の誰かわかった？）」

「（たぶん、おじいちゃんと・・・ネギ君？）」

「（僕ならここにいますよ）」

ネギの近くでなぜか怒っている様子で

「・・・そんな隠れてネギ先生にアピールするなんて、そこを代わりなさい！のどかさん！」

「（いいんちよ、声うるさい！）」

「おいしく、ってミサカはミサカは喜んでみる」byミサカ（後書き）

なんか、大半が絵になってしまいましたか・・・

今回は麻帆良学園の方をおもに書いてみました。って言うてもほとんどいんようですが・・・。アクセラレータたちの会話を楽しみにしていらっしゃった方たちにはすみません。次回はまた、科学サイドをメインに書きます。・・・たぶん。

最後に てんみんから気に入った絵を載せたいと思います。悠理さんの絵です。勝手に使つてすみません。

> i 5 6 1 2 — 1 8 7 <

「それ、どう言つことよ」by三坂美琴

現在、わたし三坂美琴は電車の中にいる。

実は、学園都市の外にある「まほら祭」というのに当麻と一緒に行くことになったのよね。

「……で……」

私はこめかみに人差し指を抑えながら、

「何でこいつらがいるのよっ！」

「だってだって、その祭りにはおいしい食べ物がいっぱいって言うんだよ。行かないわけないかも」

「いやゝ、外の祭りって俺も初めてなんだにやゝ。楽しみ楽しみ」

「いやー、実言うと俺も初めてなんや。絶対楽しいと思うでゝ」

プリエスデル

「女教皇様！、その露出しきったジーンズとヘソの上で絞ったＴシヤツは何なんですか！！」

「いや、これは左右非対称を作ることと魔術的な意味を……って五和！ あなたはこの理由を知っているはずでしょう！」

「お姉様あ、わたくしをおいて一人外の祭りに行く何て！ ぜひとモわたくしも一緒にしますわ」

「建宮斎字さんっ、とうとうあの大精霊チラメイドと墮天使エロメイドの熱き戦いが見られるのですね」

「そういうわけなのよ。だがっつつ、まほら祭にはメイド服だけでなくコスプレもあるらしいのよっつつつ！！」

「……おお……」

青い髪のパスをした自称当麻のクラスメイトから聞いた話によると。

あのバカ野郎は、私を誘った後に土御門とか言う金髪サングラス野郎にも誘おうとしていたらしい。そんでもってその話をコイツが横から聞いていたらしい。そんでもって、金髪サングラスが仕事仲間にそ手を伝えたらしい。そんでもってその同僚で、当麻と似たよ

うな髪形をした怪しい人が仕事場で言いまくったらしい。

それが今の結果らしい。

あー、もういろいろ考えてるといやなこと思い出した。

「そのあんた！ 確か前にそのデカイ胸にサッカーボールが当たって気絶した当麻を突っ込ませていたわよね！」

「えっ、いや、その・・・」

「ああ、あの『フリーキック大作戦』のときのことな」

「ん〜？ 俺そんなことしたがあああああ。痛い痛い痛い痛いー。インデックスさん、なぜそんな根拠もないことで噛みついてくるのですかー」

「そういえば前におつきいお風呂入ったときに短髪が行っていたんだよ。そのことを噛むの忘れていただけなんだよ」

「・・・はあ。」

「そんで当麻。あんたの言ってるまほら祭って・・・、流石に出血量が半端なくなってきたから頭噛みつくのやめたらどうなのよ」
当麻が必死に頭にかみついた銀髪シスターを引きはがそうとしながら、そうだそうだ、なんて言っている。

「いまの私のすることは、とうまの頭を噛み砕くことなんだよ」

タスケテ、タスケテ、と当麻の目が言っているのを無視して私は話を続ける。

「・・・えっと、で、そのまほら祭って言うのはどういふものなの？」

「ま、簡単に言ったら文化祭なんだんや〜」

答えたのは当麻ではなくその右隣に座っている金髪サングラスだった。

「文化祭って言うと一端覧祭みたいなの？」

「にゃー、ま、そんなもんなんだにゃー」

「なあーんだ、それだったら世界一の文化祭、一端覧祭を体験したからすぐ飽きちゃうかも」

「にゃー、そうとみえないみたいだぜい」

今度答えたのは血まみれになった当麻だったものの左隣にすわっている青髪ピアスだった。

「それ、どう言うことよ」

「おれもちよつと調べたんだぜい。するとどうも一端覧祭は世界一とも言えないということだにや」

「そんなわけないじゃない。だいたい学園都市^{ウチ}の技術は外よりも20〜30年進んでいるのよそれなのに」

「金だぜい」

「金？」

「そ、学園都市^{オレ}らの場合は都市内での学校のPRを前提に開かれているわけなんだにや。そのため知っている通り外の人たちが入ってくることはないんだぜい。そして、学校にも積極的や消極的もあるから、そりやお前らみたいな常盤台だったら積極的だろうけども、中には外のと変わらないところもあるんだぜい」

「単に学校から支給されているお金の量が少ないってわけでしょう、平均が少なくてもすごいところはすごいわよ」

「いやいや、まだまだだぜい」

「さつさと言ってくれ」

気づいたら当麻だったものが息を吹き返していた。

どうでもいいけど、電車のシートが血まみれになってるんだけど誰が掃除するのかしら。

「それ、どう言つじとよ」「b y 三坂美琴（後書き）」

なんだかあまりにも中途半端になりましたが長くなったのでここで
中断します。

- ・ エロメイドとチラメイドに飽きたらず、どこまでもとめるのやら・・・

「たった1日で2億6千万とか言うバカじゃない金が動くとか」by土御門元春

「さっさといってくれ」

そう言ったのは、私の目の前に座っているツンツン頭のこと上条当麻だった。

「まあそうせかすんじゃないぜい」

ふう、と金髪サングラスの土御門一（・・・だったけな？）が一呼吸おいて続ける。

「さっきも言ったように一端覧祭は学園都市内だけで行われるにやゝ、周りからいろいろな人が来ること前提で起こされる祭りとは格が違うんだぜい。話によると、そのまほら祭は100万200万円の賞金を懸けたクイズやらなんやらあるらしいし、その祭りは3日に分けてするらしいけども、そのうちのたった1日だけで2億6千万円とか言うバカじゃない金が動くとか。もちろん3日間かけて数千万稼い出利だりするサークルも存在するんだぜい」

「・・・す、数千万・・・」

すうせんまん？ ケタ間違ってんじゃないのソレ。サークルって言う限り大学生なんだろうけど3日で数千万はあり得ないでしょ！！

「テクノロジーについてもすごいんだにやゝ。全部が全部そういうわけじゃないんだが一部の機関では学園都市をも上回る技術が開発されていたりするんだぜい。独立歩行型機械スタンダアロンの機動力も半端ないし、そこに積んだAI（人工知能）何か典型的なんだにやゝ」

「そんなうそ！ 学園都市の科学技術力は外の20～30年進んでるのよ！」

「でも事実なんだにやゝ」

金髪サングラスのことを聞いて私は愕然としてしまった。

もはや、一端覧祭が世界一じゃないことを認めざる負えない。っていうかそんなにお金が動くんだったらもはや文化祭という枠から外れているんじゃないかしら。

「まあよかったんじゃない？ 期待はずれみたいなことになりそうであく。 なっ、ビリビリ」

まあそう言われればその通りなんだけど・・・

いや、これはむしろチャンスかもしれない！

sonだけにぎわった祭りならどさくさにまぎれてこのフザケた集団からのがれて当麻と二人きりになれるかもしれないっ！！！

一端覧祭の時も結局何もできなかったし、なんとしても・・・

午前9時頃、電車のアナウンスが聞こえてきた。

『まもなく、麻帆良学園都市大正門前、麻帆良学園都市大正門前。右側の扉が開きますのでご注意ください。』

「つちよ、降りるわよ！」

「ええ、ああ、うん」

「とうまとうま、待つて」

「うっしやああ、いくぜい」

「ウチも頑張つてエンジョイしたる！！」

「プリエスデル女教皇様、私は仕掛けます。あの少年につ、チラメイドがなくても衣装は何とかして入手します！！！」

「えつつつ、なつつつ、そつ、あんなのはもう着たくない。いいい

いいいいや、もう私もそう言っている余裕はありません。わたしもよりあの方に近づくためにつつ」

「いよいよつ、いよいよあの勝負がアツツ」

「おおおおお落ち着けえ、牛深あ！ ここは抑えるんだ。」

「お姉様ああ、ぜひぜひぜひひい私と一緒にこの祭りを回りましよう！！」

「アンタら全員私についてくるなああ！ そしてそのツンツン頭、あんたはこっちへくるう」

やってやるわ。一端覧祭の時の二の舞はしないっ。そしてこいつ

とこの祭りを回るっ。まわりきってやるっ。

「たった1日で2億6千万とか言うバカじゃない金が動くとか」by土御門元春

次回からいよいよ本格的にまほら祭へ突入します。初めての外での祭り。けども、上条たちにはすまないけども、感覚としては一端覧祭が大覇星祭とほぼ変わらないような気がします。

あとネタですが、「ネギま！」を読んだ方は知っているでしょうが、土御門の言った化学側学園都市よりも一部魔法側学園都市の方がテクノロジーが進んでいる理由が、「超^{ちやっ}鈴音^{りんしえん}という100年以上後の未来人がいるからです。そりゃ、100年後技術と30年後技術だったらどちらが上かすぐにわかりますよね。・・・

「ギャーーーーー」 by 近衛 近右衛門

「わー、わー、すごい。ってミサ力はミサ力は初めてくる外の祭りでめちやくちはしゃいでみる。そして、こつて、一般企業も出てきてるんだー、とこの規模の大きさに驚愕もしてみる」

「ふお、ふお、ふお、残念じゃが、ここには一般企業は一つも出たらんぞ」

「ええっ、うそっ。じゃあのジェットコースターとかは！？ とミサ力はミサ力は指をさしながら見たことのない物体に対して情報をネットワークで参照してみる！！」

「あれは全部うちの生徒が作ったものじゃよ」

「うそー、のつとつてみたいのつとつてみたい、とちよつと恥ずかしいのを抑えつつすごいボケをかましてみる」

「うーん、身長が足りなくてちよつと無理かのお」

「いえーいちよつとぐらい突っ込めよ、とミサ力はミサ力は軽く腕を振り回す、そして身長ぐらい気にするなあーと言わんばかりの顔つきで目の前にいるクソじじい、もとおい学園長の顔を見る！！」

「・・・しゃーないのー、じゃあこれを食べなさい」

「飴玉でごまかそうつたつてそうはいかない、とその飴玉食べたいな、おいしそう、という本音を隠しつつミサ力はミサ力はよだれを必死に耐える」

「ちがうちがう、これを食べるとな・・・なんと体が大きくなるんじゃないよ」

「うそだー、はっ、 možy たくさん物を食べると早く大きくなるよ」とか言うオチだなっ、とミサ力はミサ力は早くその飴玉ちよーだーい、という本音を必死に隠す」

「まあまあ、だまされたと思って・・・」

「だまされたくないっ、ってミサ力はミサ力は もう我慢できないっっっ！！！」

ぱくっ（学園長の手にあった飴玉を手ごとかぶりつく音）

ギャーーーーー（手ごとかぶりつかれた学園長の叫び声）

ボンッ（ラストオーダー打ち止めが謎の煙で包まれる音）

「いた、いた、痛たたたたた……おおー見事に大きくなつとるぞ」

「げほ、げほ、っとミサカはミサカはわざと咳をしつつ煙を手で払う。……あれー？何か目線が高くなったような気がするっとミサカはミサカは周りを見まわしてみる」

「年は娘のこのかぐらいかのー、中2か中3かぐらいかな」

「……ほ、本当に大きくなってるううううううー」

「お、おいどこへ行くんじゃー、まあいっかの」

「ギャーーーーー」 b y 近衛 近右衛門（後書き）

チョット間が長くなりました。

更新しようと思いつつできなくてももう悲しすぎます。

ちなみに、あの謎の飴玉は、「年齢詐称薬」というものでネギま！で登場しているものです、プラスマイナス10さいから5さいまでの調節が効くというやつです。最も、外見だけで厳密には幻術という設定らしいですが・・・幻術超えてね？

「前女子コーサーを裏道に連れ込んでなかったかにゃ〜？」

b y 土御門元春

「で・・・ピアス。どうして俺らはここにいるのかにゃー」

土御門は若干ニヤケながら隣にいる人に話しかける。

「もちろん！、この麻帆良祭？コスプレコンテストを見るためや

！！」

「キターー」

二人はいまとあるコンテスト会場にやってきている。このコンテストはアニメに登場するキャラクターに変装してどこまで可愛くなれるかというものである。

「やっぱ、俺いもの地味子がサイコーだにゃー」

「いやいや、初期プリキュアのバカブラックやろ」

「古っつ！ つーかバカブラックじゃないぜい。それだったら『魔法少女・ビブليون』の方がいいぜい」

どんどんマニアックな方向へと進んでいく二人。そこでふと青髪ピアスが何かに気づく。

「ん？あれは・・・」

「どうした？」

「あー！ー！ー！ネギ君や ！！」

「おい、ちょっと待てい！」

「おーい、ネギくん」

土御門を無視して声を出す青髪ピアスの声でそちらを見るネギとその近くにいる御一行。

「あつ、青髪さん。お久しぶりです」

「ネギくん、この人だあれ〜？」

「わいは、青髪ピアスのこと、青髪ピアスや」

「どっちも青髪じゃん（ビシッ）」

「こいつに近寄るんじゃない佐々木まき絵。髪の毛は染めてるし、ピアスもしている。明らかに不良だ」

「ち、ちよつと、そんなこと言っちゃだめですよ千雨さん」

「せやで、うちはそんなことせえへんで」

「ピアス、前女子コーサーを裏道に連れ込んでなかったかにや
？」

「ちよ、なんでこんな時にうそ言っん！」

「うわあ……」

その場にいる全員が思いつきり引く。急激なイメージダウンにしようぼりする青髪ピアス。さすがにやりすぎたと思ったか千雨が謝りだす。

「あー、すみません。ちよつと言い過ぎました」

「ちよつとちやうやろ！今のうちでうちのハートどんだけこぼにされたと「そういえばネギ先生が年上をあだ名で呼ぶって珍しいですね」話をとぎらすな！そしてスルーすんな！」

「ん？あだ名じゃないですよ」「こらネギ君もスルーすんな！！！」

「ええつ、青髪ピアスっていうのが本名！？」

「も・いい、つか土御門！お前はうちの名前しつとるやろ！」

「知らなかったにやー」

「オイッ！！！」

「青髪さん、最初会った時ってこれが本名って言ってたじゃないですか！」

「あーあれウソ」

「えっ！……」

「じゃあほんとの名前教えてくださいよ」

「んー、せやなー……」

あごに人差し指を載せて上を向いてしばし騙り込むと。

「ひみつううー」

「前女子コーサーを裏道に連れ込んでなかったかにゃ？」

b y 土御門元春

こんにちは、やりたいことがたくさんありすぎて何一つ出来ない杉田玄白です。気付いたらこんな時間になっちゃいました。これから頑張って連載したいと思いますのでよろしくお願いします。

青髪ピアスの本名って何だろう・・・

解散と同時に御坂美琴は上条当麻の腕を掴むなり、元々足が速いことに足して体内の生体電流を操作して秒速52mという恐ろしいまでの速度で走ったのだ。もちろん、当麻はそのまま引きずられてあちこちボロボロなわけだ。

「いてて、で行く当てであるのかと思ったら、ねーのかよ！」

「仕方ないでしょ、こんなにたくさんあるんだから！」

御坂はまほら祭のパンフをじつとかれこれ20分ほど見ていた。実際にここにあるアトラクションはとてつもなく多い。あまりの多さに待ち時間がどこも20分程度で、3日間で主要アトラクションを回るのでさえ無理だと言われている。

「……あーもう！そんなに迷うんだったらあれいこ、あれ！」

上条はテキトーに自分の後ろにあった店を指す。

「……貸衣装屋？」

「と、取りあえずなんか服変えてそれから考えればいいじゃん」

「……えー」

「つべこべ言うな。人を長い時間待たせやがって」

上条は半分無理矢理引っ張って行く。

御坂は上条に手を握られてドキドキしながら引っ張られて行く。

服の種類は豊富だった。サイズ問わずロボットなどの着ぐるみ、ちよつとアブナイ水着、童話やアニメキャラのコスプレ、中にはパジャマみたいなものもあった。

御坂は中に入ってから何か浮かんだらしく、ねえねえと声を掛ける。

「なんだ？」

「女装しなくちゃならないんだ――――！！！」

b y 上条（後

なんだかテニスにはまっている杉田玄白です。

なんだかどんどん投稿間隔が広がって言っているような・・・

こんな話に付き合ってくれてありがとうございます。

次回はこの続きをします。

とりあえず、さつき服を放り込んだ機械を操作してみる。その機械のタッチパネルに表示されている選択肢は3つ、1つは大きくあおい「宿泊先を選ぶ」、もう2つはタッチパネルの隅にある小さな「English」と「メンテナンス」だ。

当麻は服をさらにホテルへ送るわけではない。ここで選択するのは「メンテナンス」だ。当麻はそれを押す。するとパスワード入力画面が出てきた。関係者以外がいじるのを防ぐためのものだろう。当麻はこの機械を蹴った。だが痛みが自分の足にむなしく返ってくるだけ。

すう、と大きく息を吸い込み、

「不幸だあああああああああああああ————
————！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

貸衣装屋から出てきた時は、二人の顔は対象的だった。美琴はとても晴れ晴れしていて、当麻は顔が死んでいた。

祭を楽しんでいる他の人々の目にはこう映っていた。

可愛い水着姿の女の子と変態赤ずきんが並んで歩いている。と、

「嗚呼アア亜あアア亞阿ア？アアアアアアア！！！」by一方通行（前書き）

必ずお読みください

今回の小説にはいちばん最後に挿絵が入っています。

キャラクター崩壊の可能性があるため

もしくは、心臓の弱い、体調がすぐれない人などは挿絵をOFFに
してからお読みください。

だがあいつは・・・

「あれー、もしかしてシカトしてるー？ってミサカはミサカは一方通行の視界と思考をミサカネットワークを通して覗いて「ナニ覗こうとしてヤがる」どわぁ！ってミサカはミサカは驚きを露わにする」

「デメエ、本物の打ち止めか？」
ラストオーダー
アクセラレータ

一方通行は打ち止めをよく観察してみた。

まず胸が大きい。いや、特筆すべき点はそこではないが、とりあえず大きい。

「なんか胸ばかり見てない？ってミサ「気のせいだ」・・・」

次に身長。確か118cmだった。だが目の前にいるミサカは160cm程、150は絶対に超えている。

「もしかしてミサカのナイスバディにうつと「うるセエだまレ」・・・」

「・・・」
アクセラレータ

一方通行は、はぁ、とため息ひとつつき打ち止めに尋ねる。

「とりあえずだ。デメエナンでそんな服きている」

「その貸衣装屋さんで借りたのだってミサカはミサカは自慢してみろ。あつ、一方通行も着てみ「断る」・・・だったらもつと恥ずかしい目にあわ「断る」・・・」
アクセラレータ
「こぉーなったら意地でもしてやるーってミサカはミサカは宣戦布告を試してみたり！」

「ハッ、ヤレるもんならやって下さい」

アクセラレータ
一方通行の思考が一瞬止まった。

「デメエ 何しやがったツツ・・・」

「ふふふ、チミの思考演算は誰がやっているのかわかってミサカはミサカはちょー上から目線で大きな実力差を提示してる」

アクセラレーター
一方通行はその一言で全ての予測がついた。

実際に、アクセラレーター一方通行の思考演算を担当しているのはミサカネットワークである。その道順を細かく言えば、手を挙げるといふ例を使つて表すと

1、アクセラレーター一方通行がチョーカーを通してどうやって「手を挙げるか」ミサカネットワークに教えてもらえるように申請

2、ラストオーダー打ち止めがそれを許可し、「どうやって手を挙げるか」の情報
をミサカネットワークに流して御坂妹たちに演算命令を出す

3、「肩の筋肉を縮める」という演算結果を御坂妹達が出す

4、宇宙衛星からチョーカーを通して「肩の筋肉を縮める」と命令
を下す

5、肩の筋肉が縮まり腕が上がる

つまり、2、の段階で命令内容を書き換えればアクセラレーター一方通行を自由
に動かす事ができるという事だ。アクセラレーターさっきの一方通行の打ち止めに対
する敬語はそういうりくつで行われた。

アクセラレーター
一気に青ざめる一方通行。

「ふふふ、これでわかったかね（タッタッタ）逃げようとしても無駄だよ。つてミサカはミサカはちょー上から目線で言ってみる。

アクセラレーター
突然一方通行の足の動きが止まる。

アクセラレーター
ジョーダンじゃねエ。

アクセラレーター一方通行は近くを歩いている一般人客に（彼にとっては珍しく）
助けを求める。

「嗚呼アア亜あアア亞阿ア？アアアアアアア！！！」by一方通行（後書き

サバイバルゲームにはまりだした杉田玄白です。

いやー台風すごいですねー。私にとってはうれしい限りです。なぜかって？

雨風がひどい中を大声出しながら走り回ったら気持ちいいじゃないですか！！！！

ご近所さん、すみません

どーでもいい話は置いといて

今回初めて自分で書いた絵を掲載してみました。いかがでしょう。最初の注意書きで呼んでいない方はそのまま結構です。

いや、ヘツタくそですね。

とりあえず一方通行とわかるようには努力したんですが。。。どうでしょう？

胸のふくらみは急遽入れました。

妹のスク水見てみると胸パッドがあるんですね。

いやー男の私としてみればびっくりしました。何で胸パッドが！？って感じです。

あ、その皆さん妹の引出からスク水引っぱり出している姿を想像しないでください。とりあえず、許可取っているのです。

忙しくなくてよーがあればまた書きたいと思います。

では皆さんに感謝の言葉を送りたいと思います。

kyo-heppokoさん、わざわざメールを送っていただきありがとうございますをくださってありがとうございます。

hiradaiさん、俺頑張ってるよ。いつも応援・・・されてない？

ウチのお母さん、こんな汚い絵を保存してゴメン。すぐ消すから。

では次回予告です。

結局上条当麻との行動を逃してしまった五和一向。

なんだかんだで楽しんでいるが、ふと一枚のチラシに目が付く。

「まほら格闘大会」

賞金目当てに参加してみるのが・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4366p/>

科学学園都市住民が魔法学園都市の祭りへ行く

2011年10月5日07時24分発行